第4回宗像市小中一貫教育推進協議会 会議録

日　時	平成25年12月17日(火)午後6時00分から午後7時30分まで
場　所	宗像市役所北館2階 202会議室
出席者	【委員】 石丸哲史、前田誠、中村淑恵、船越美知、脇田哲郎、井ノ口真一、 水田尚文、中村藤恵、池田隆、武内勉、木村秀子 【事務局】 教育部理事 後藤正弘、教育部長 髙橋勇次、 教育政策課長 岡田光晴、教育政策課指導主事 羽田野崇、 教育政策課指導主事 西島潔、教育政策課指導主事 正路澄代、 教育政策課政策係長 許斐知加、教育政策課企画主査山本幸江 (敬称略)

1 開会挨拶　会長挨拶

2 日程説明　事務局 教育政策課長(資料1)

3 前回の会議録の確認　承認(資料2)

4 協議　今後の小中一貫教育「基本方針改善案」について(資料3)

○前回からの修正点について説明　事務局 羽田野指導主事

・11月20日に開催された定例教育委員会にて本協議会の進捗状況について報告がなされたが、これまでの協議に大きく関わるような意見等は特段なかったと聞いている。今後は状況に応じて事務局から報告をいただきたい。本日は、基本方針改善案について細かい内容を詰めていきたい。意見をいただく最後の機会だと思うので、気づいた点等をどんどんだしていただきたい。

・16ページの図7について、学校の生きる力のみ自立とかかわりとくくっているのは何か意味があるのか。

→自立とかかわりについては、生きる力に含まれると考える。家庭と地域については、それぞれ生活習慣、学習習慣等あるいは規範意識、社会性等を重点的に子どもたちに育てていくといったところで、より関わりがでてくると思っている。

・図7の地域のところに「規範意識、社会性等」と書かれているが、16ページ「アめざす学校像」の2行上には、「規範性」と書かれており、17ページ「ウめざす地域像」の2行目も「規範性」となっているので、表記を統一した方がよい。

・めざす家庭像、地域像、学校像について文章化されている内容を反映した形で図7があるべき。図の表現が適当であるかどうかを検討いただきたい。規範意識と規範性については、規範性という表記に統一していただきたい。

・図7について、学校教育にも当然、生活習慣や学習習慣、規範性や社会性を育む役割がある。図7の書き

方では誤解を招かないか。

→学校教育でも生活習慣や学習習慣を身に着けさせなければならない。その一方で、家庭でも生活習慣をしっかり整えていただく、あるいは学習習慣等をしっかり身に着けていただく。そのような取組があると、特に自立とかかわりについて、学校での子どもたちの育ちがより強まるだろうと考えている。同様に、規範性や社会性についても、学校の中でも育てていかなければならないし、それを前提として考えているが、地域からも応援いただくことによりさらに子どもたちの成長がより望ましいものになると考えている。

・16ページと17ページで文章が展開されているので、図は概念的なモデルとして極力シンプルにした方がよいと思う。3つの円が重なり合うパターンは、コミュニティ・スクールでよく概念図として用いられるが、そういう意味では、例えば学校ととらずに学校の役割、家庭の役割、地域の役割という形でそれぞれの円を定義づけたらよいのでは。あるいは学校の教育、家庭の教育、地域の教育という相対的な表現にしておいてはどうか。いずれにしても、3者が一体となって子どもの教育に取り組まなければいけないということをいうためのモデルであるとするならば、できるだけシンプルにしたほうがよいのではないかと思う。

・おそらく書けば書くほど、これはこっちではないかというような話になる。図が目立って文章の方が隠れてしまうきらいもあるだろうから、できるだけシンプルにということでよいか。

・子どもを育てるという観点から考えると、学校は、地域は、家庭はという表現がわかりやすい。例えば地域コミュニティにはいろいろな部会があり、さまざまなことをやっておられる。子どもの教育に対して、なにができる、学校はこんなことをしていただける、だから互恵的な関係じゃなければならない部分もあると思う。そのようなことを考えると、もっと柔らかく、学校として地域にこんなことをお願いできないだろうかぐらいがちょうどいいのではないかと思っている。地域の役割、家庭の役割という表現がよいのでは。

・学校、家庭、地域と書いて、それ以上は書かないということも選択肢としてはある。

・一般論として、学校、地域、家庭の役割というのはよく言われる。

・基本的なベースとして、学校、家庭、地域が小中一貫教育を支えるということで、簡潔にこのような位置づけをしておいた方がよいと思う。学校は家庭と地域の支えがあってうまくいっている。

・図7について意見を集約すると、役割という文言を入れるということでよいか。図が全てではなく、文章がきちんと補完されていれば問題はなく、あとはイメージとして捉えられるための図だと考える。

・21ページ イ 第Ⅱ期研究校が選択して実施する事項の5行目に「教科・領域」という文言があり、他にも「教科・領域」という言葉がいくつか用いられているが、領域という言葉は全部外れていると思うので、全体的に確認して標記を統一した方がよい。

・24ページに書かれている学園コーディネーターについて説明をお願いしたい。

→学園コーディネーターについては、それぞれの中学校区の小中一貫教育をより組織的に進めていくうえで、いろいろかかわっていただくという立場を考えている。こちらの意図としては連絡調整をメインとして役割を担っていただくイメージである。

・7校区すべてに割り当てるのか。

→次年度から7校区すべてに配置できるかどうかは不明だが、随時配置していきたい。

・学園コーディネーターの役割というのは、学園長が事務局の校長先生であるとするのならば、その校長先生も多忙か、あるいはコーディネーターとしての役割まで担わせないという過度の負担を解消するための役割であると考えてよいか。

→現段階では学園長についてそれほど仕事を考えているわけではない。前回まで議論になっていた連絡会についての記述も削除した。小中一貫教育に取り組んでいることを対外的にアピールする立場を考えている。その一方で、校長先生、教頭先生、主幹教諭、あるいは教務主任の先生が、学校間の連絡調整に苦労されているので、その部分で中学校区全体を見渡して取り組んでいいただきたいと考えている。

・現場サイドの意見だが、地域の中にいて学校が地域と連携する際にコミュニティ課にもそのことをきちんと理解しておいてほしい。行政の中の横のつながりにおいて、小中一貫教育を理解していただきたい。教育委員会と市長部局の連携を図ることも大事な支援だと思う。

→市の重要施策として小中一貫教育に取り組んでいるところだが、行政内部の連携が不十分なせいで学校や地域に迷惑をかけている部分があれば、改善が必要である。

→役所の中の指揮命令に関わる部分。ご意見として賜りたい。

・小中一貫教育だけでなく、コミュニティと学校はいろいろなつながりがあるが、校長先生方が知らないことや逆にコミュニティが知らない部分がある。会長会なり事務局長会なりの中で、「こういうことをしていきます」とはっきりおっしゃっていただければコミュニティとしても非常にやりやすい。

・21ページ「イ　第Ⅱ期研究校が選択して実施する事項」に小中共同の教科部会が必要だと思う。小中学校がいっしょになって、教科別に分かれて会議をしているが、お互い勉強になったという話をよく聞く。

→各中学校区では教科部会にかなり熱心に取り組んでいただいている。実際に、その中で学力調査の結果を出しあいながら、中学校区の子どもたちの弱い部分についての研究なども行われている。子供の実態に即しながらカリキュラム作成に向けて手続きを行うことも非常に重要なので、ここに位置づけていきたい。

・不登校生徒数のグラフについて、中学校における不登校生徒の推移が削除されたのには理由があるか。中学校に入ってからの不登校に対する細やかな対策がまだまだ今後も必要ではないかという印象をグラフがあることによって意識づけられ、次の第Ⅱ期につながっていくと理解していた。これがなくなってしまうと、もちろん対策はされると思うが、そのあたりの印象が薄くなってしまう。

→前期、中期、後期でいくと、中期(小学校5年・6年、中学1年)にかなり重点を置いているところがある。実際、不登校については多様な原因が考えられる。そういったところも含めて小中一貫教育の有効性といったときに絞り込んで数字をみた方が取組みと成果の関係性がみやすくなると考えた。

・19ページ、イの記述で、「「～一貫の充実を図ること。」と示している内容は、中学校区や学校で取り組む内容である」と「「さらに～考えられる。」としている内容は、【〇〇学習】をさらに発展させる内容として示している」の違いがよくわからない。前段はどの学校もという意図で、後段はこういうことを参考にという意図で書いてあるのか。

→国際理解学習を例とすれば、前段の部分「英語を用いたコミュニケーションを図る学習活動を連携・発展させ、外国語活動と外国語科との一貫の充実を図ること」には取り組んでいただきたい。さらに充実を図れるということであれば、プラスアルファとして、外国語活動と外国語科の一貫を図るだけでなく、後段の「生活科や国際理解を課題とする総合的な学習の時間との関連を図り、教育課程を構成すること」にも取り組んでいただきたい。

・まずはこの4点あげてあるところから選択すると理解してよいか。選択したものについては、上段のところは必ずやり、さらに発展してできるのであれば下段のものをやるというとらえ方でよいか。

→はい。学校にそれぞれ実態があるので、いろいろ解釈を行いながら取り組んでいただくことになる。ここでは、

2段階構成としており、後段部分はさらに充実をさせるという内容のもの。学校の実態に応じて取り組んでいただきたい。

・教育課程に関しては、今回、新しくでてきた部分もあるので細かくみてご意見をいただきたい。

・「教育過程を構成する」という文言について、教育課程はこの漢字でよいのか。

→「教育課程」の誤りである。

・教育課程ならば「構成する」ではなく、「編成する」ではないのか。

・教育課程を編成するという表現にしていただきたい。

・今七つの学校区の調査研究が終わっているわけだが、どちらかというとそれぞれの学校区の実態に応じた教育課程を編成して、指導計画を作成していると考えたときに、国際理解教育、ふるさと学習、キャリア学習という3つの観点が示されているが、大体これに集約されると予想しているのか。

→特に国際理解学習に関して、外国語活動と外国語科の接続については今後必要になっていくと考える。宗像市は先駆けて3年生から、学校によっては一年生から外国語活動に取り組んでいる小学校もある。そのあたりからこういうところは増えていくのではないかと考える。中学校区においては、ふるさと学習と銘打たなくても、そのような取組みをしているところがある。できるだけ既存のものをこういったものに置き換えていただきながらさらに充実を図っていただきたいと考えている。

・今、社会から求められている観点からいえば、そうなるかもしれない。例えば河東中学校区では、河東小学校が長く外国語活動に力を入れた指導を行っており、そのことを中学校区で発展、広げていこうという取組みがされている。そういうところは国際理解学習、外国語のところを含めて充実、発展させるのではないかと予想できるが、実際に7中学校区で進んでいくのか。これは「等」というとらえ方でいいのか。それとも、3点の事項は必ずやることとして捉えるのか。第Ⅱ期調査研究校が選択する「事項」として示されているのか、選択する「事例」として示してあるのか。

→選択する事項として考えている。一番下にあげている福岡教育大学との連携も含めてどれかを選んでいただき、取り組んでいただきたい。

・7中学校区のこれまでの調査研究の中から出てくるものとして、4点の事項をあげられたと解釈してよいか。

→実際にいろいろな中学校区での取組みを見た際に、中学校区すべてをいっしょにしてしまうということではなく、それぞれの中学校区で地域の実態に合わせて特質を発揮していただくのが望ましいと考えている。ひとつに絞るのではなく、中学校区で現在されていることがつながりそうなものとして複数を示しながら、それぞれの中学校区で特質を発揮していただきたい。

・福岡教育大学との連携という場合は、上記の3つの事項でなくてもよいということか。そういった場合は、教育大学の方からこういう研究内容あるいはこういった取組みをしたいという場合は連携という形を行うということか。

→今すでに連携プロジェクトということで進んでいる。

→現在は、3分野において連携を進めている。理科として、若年教員を対象とした教科の指導、教職員研修を行っているし、特別支援教育、ICT 活用ということも進めている。来年度は、特別支援教育、外国語、算数科、ICT 活用の分野でプロジェクトを実施する予定である。その他にも言語活動に取り組んでいる学校もあり、校区連携ということで、校区がどの進路をとられるかということを今考えていたところである。

・ここにあがっている3つの学習以外にも選択肢があるというイメージでよろしいか。

・言語活動というのは具体的にはどういう活動になるのか。

→言語活動としては、交流や自分の考えをまわりに伝わるように説明する活動を授業に組み入れて、自分もまわりも理解を深めることができるようにする。たとえば、大島ではキャリア教育ということで、将来15の春を迎えるという視点に言語活動の充実を重ねて推進している。発表や説明に限らず、書いたり発信したりすることにも取り組んでいる。

・今説明があった交流活動を推進していくということであれば、この4つの○の中には含まれてない内容だと思う。その他の項目までも含めて中学校区でやっていくということであれば、もう一つ項目を新たに起こさないと、選択の余地がないのではないか。上の3点は、どちらかというと総合的な学習の時間の小中の一貫を図っていくことが柱で、最後の事項は、特別支援教育やICTという指導方法について教育大学の知恵を借りながらやっていくということ、あるいは理科や算数・数学であれば、教育大学の知恵を借りてしっかり教科指導を整えていくということである。ひとつの校区の特色としてやっていこうという方向だろうと思うが、交流活動については違うのではないか。

→校区の実態ということで説明したが、教育大学との連携の中に言語活動が含まれているということではない。

・「福岡教育大学との連携によってテーマ設定された学習」というようなくくりを作ると、この枠組みの一項目として位置づけられるのではないか。他の国際理解教育やキャリア教育等以外の項目も柔軟に設定、対応できる。そういう雰囲気を反映したかっこ書きというのはいかがか。池田教授のお知恵を拝借しながら大学としてのスタンスを含めて、事務局と調整して次回提示させていただくということでよろしいか。

・ふるさと学習の中で地域の学習対象とする、地域の教育力を活用して特別活動の題材開発を行うというのは、どんなことを想定しているのか。

→たとえば釣川を題材にして学習をすることなどが考えられる。地域の教育力の活用としては、地域の方に学習にきてもらうことが考えられる。

・地域色豊かな地域素材を開発したり、実際の教育活動の中に地域性を反映したような GT をお招きしたりすることだと考える。

・特別活動の中で題材を使うのは学級活動しかないのでものすごく狭くなる。この方針は広く市民にでていくものなので、誤解のないように文言の整理をされたらよいのではないか。

・ふるさと学習の中で、沖ノ島の世界遺産登録活動について、学校で教育はあっているのか。

→社会科の授業中心であっている。もっと積極的に総合的な学習に取り入れることも考えられる。

・16ページの図7は、学校、地域、家庭がみんなでするということが分かればよい。誤解されないように図はシンプルなものにするか、ない方がよい。コーディネーターの募集記事を広報紙で見たが、誰がどんなことをするのか。21ページ イの2番目の○の記述について、小学校の先生がTTで中学校の授業に入って、中学校の先生が指導しやすいのか。中学校の先生が小学校に行き、しっかりと子どもをみてほしい。ある領域だけでやるのではなく、中学校の先生を週2日程度、丸1日小学校にいさせるのがよい。そんなことができるようにコーディネーターを使ったらよいのでは。勤務体系を考えて、システムを入れさえすれば現実的に動きがでると思う。中学校の先生が小学校に入ることに価値がある。

・今の意見は運用面で考慮することが可能。会長として意見を述べさせていただくと、小中学校の相互交流、相互理解が必要だと思う。どちらの先生方もプライドをもって日々教育にあたっておられる。文化や校種が違うところにいくと必ずや得るものがあると考える。

5 閉会挨拶　会長挨拶

6 諸連絡　事務局 岡田教育政策課長より。

第5回会議は、平成26年1月9日(木)午後6時から市役所北館2階202会議室にて開催。